



Title	ヴィゴツキー理論に基づく乳幼児教育カリキュラムの比較検討
Author(s)	岡花, 祈一郎
Citation	琉球大学教職センター紀要 = Bulletin of Center for Professional Development of Teachers(2): 31-39
Issue Date	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45505
Rights	

ヴィゴツキー理論に基づく乳幼児教育カリキュラムの比較検討

岡花祈一郎

Comparative Study of Early Childhood Educational Curriculum Based on Vygotsky's Theory

Kiichiro Okahana

The purpose of this study is to examine the ECEC curriculum based on Vygotsky's theory from a theoretical point of view. It is try to clarify the characteristics of each program by summarizing the similarities and differences. This paper covers 6 ECEC programs covered in Fler M., van Oers B. (Eds) (2018), International Handbook of Early Childhood Education, Springer. The six curricula are Piramide, The Golden Key Program, Narrative Play Pedagogy, The Key to Learning Curriculum, Tools of the Mind, and Developmental Education. Through these investigations, the following three points were clarified. First of all, the contents of childcare centered on play were planned. This can be understood from Vygotsky's emphasis on play as a leading activity. The second point is that the educational relationship for children between teachers. Some programs refer to the concept of the zone of proximal development and are often associated with different age groups. Third, it aims at the development of self-regulation and social emotional ability. On the other hand, there were differences in the stance toward play and the role of childcare teachers.

1. はじめに

OECDのStarting Strong II (2004)によれば、世界の保育カリキュラムは、就学準備型と生活基盤型の2つのタイプに分けられるという。就学準備型カリキュラムの特徴は、認知発達を核として知識やスキルの獲得に焦点を当てている点にある。他方で、生活基盤型カリキュラムの特徴は、乳幼児期を生涯発達という長期的なスパンからみたスタート段階として位置づけ、子どもの発達課題だけではなく、子どもの生活や家族への支援を含む包括的な点にある。

しかしながら、就学準備型と生活基盤型かという二元論的な分類は必ずしも妥当ではないと考えられる。我が国の要領指針においては、「遊びを通しての総合的な指導」を重視しており、生活や遊びのなかで読み書きが登場することもあり、領域環境では文字や数に親しむことが内容として示されている。このように保育実践のなかで、子どもは多様な活動を通して読み書きなどの認知的な能力だけではなく多様な資質・能力を総合的に獲得している。その意味では、就学準備型か生活基盤型のどちらかという二者択一的な分類ではとらえきれない保育実態とカリキュラムが実施されている考えられる。

ここで注目したいのは、ヴィゴツキーの遊びと言語の捉え方である。ヴィゴツキー(1989)は、乳幼児期の主導的活動としての遊びの重要性を指摘しており¹、特に文化的道具としての言語を媒介とした活動に着目したことで知られている。近年、米国、欧州、露などでヴィゴツキーの理論を中心とした乳幼児カリキュラムが開発され、その効果が検証されている。これらの乳幼児カリキュラムでは、遊びなどを通した活動を中心に置きながらも、文化的な価値(読み書き)の教育を明確に位置づけているのである。これらを検討することは、遊びか学びか、生活基盤型か就学準備型かといった議論を乗り越える手がかりが得られると考えられる。

以上をふまえ、本研究ではヴィゴツキーの理論を基礎とした乳幼児カリキュラムを理論的な観点から比較検討を行うことで、その共通点および差異を整理し、それぞれのカリキュラムの特質を明らかにすることを目的とする。これらの検討することは、遊びを中心とした日本の保育内容

やカリキュラムを構想する際に一定の示唆が得られると考えられる。

2. 対象となるカリキュラム

今回は、Fleer M., van Oers B. (Eds) (2018). *International Handbook of Early Childhood Education*, Springer. で取り上げられている6つ乳幼児カリキュラムを対象とすることとしたい。編者のFleer M. と van Oers は、ヴィゴツキーの考えをベースに乳幼児教育の研究をしている研究者であり、この6つはいずれもヴィゴツキーの文化歴史的理論を基礎として構想されている。今回はそのなかで、6つのカリキュラムとは、ピラミッド・カリキュラム、ゴールデン・キー・カリキュラム、ナラティブ・プレイ・ペダゴジー、学びへの鍵カリキュラム、心の道具カリキュラム、発達の教育カリキュラムである。

3. ヴィゴツキーの理論をもとにした乳幼児カリキュラム

1) ピラミッド・カリキュラム (Piramide)

ピラミッド・カリキュラムは、1994年に、オランダの政府教育評価機構（CITO）によって開発された乳幼児カリキュラム（生後まもなくから7歳まで）である。ピラミッド・カリキュラムは「子ども主導 (The Child's initiative)」, 「教師主導 (The Teacher's initiative)」, 「寄り添い (Nearness)」, 「見守り (Distance)」の4つの原理から構成されている。ヴィゴツキーやピアジェのほかダイナミック・システムズ・アプローチなどを参照にしながら組み立てられている (Koerhuis et al, 2018)。

原則、異年齢の小グループによるプロジェクト活動が展開されている。また年齢によってねらいやレベルが分けられており、志向する、実演する、広げる、深める、といったサイクルにより構成される。

ピラミッド・カリキュラムは、これらの活動を通して、身体的、感情的、認知的発達を適切かつバランスよく育てることをねらいとしている。

教師の役割は3つのレベルの支援と介入に分けられている。ローレベルは、子どもの遊びが充実したものとなるように、豊かで構造化された環境を準備することである。教師は子どもの遊びを注意深く観察し、子どもたち自身で遊びが発展するように低いレベルの介入を行う。ミドルレベルでは、子どもたちが遊びに集中できていない、遊び込めていない場面に、教師が意図的に介入する。最終的には子どもたちが選択できる場所まで持って行く。ハイレベルでは、子どもたちが何にも関心を示さず探求したり学んだりしていない場合、教師は高いレベルで介入する。一緒に何かをしたり、デモンストレーションをすることで、子どもの意識を遊びやプロジェクトに向けさせ、徐々に教師は子ども自身が遊びや学びを独りでできるように支援の度合いを減らしていく。これらの3つのレベルは、プロジェクトのなかで、長期的・短期的に、「方向付け (orientation)」 「デモンストレーション (demonstration)」 「広がり (broadening)」 「深化 (deepening)」 というサイクルを繰り返すように構想されている。

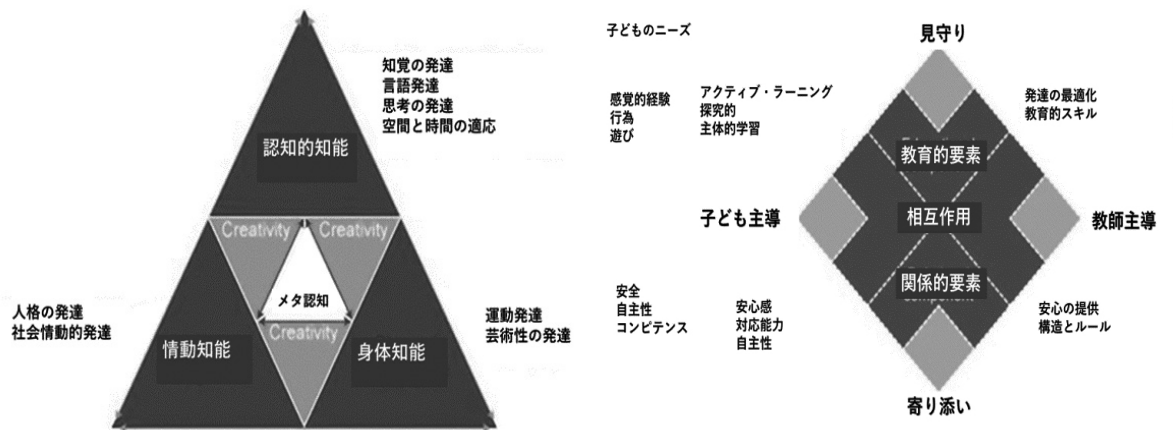


Fig.1 ピラミッドカリキュラムにおける三つの知能 (Koerhuis et al, 2018, p.998) Fig.2 ピラミッドの4つの原理 (同左, p.1001)

評価は観察やポートフォリオの他、標準テストを導入しているのも特徴の一つである。以上のようなカリキュラムは、“ピラミッド・メソッド”として、ドイツやアメリカのNAEYCなどでも取り上げられ²、我が国では、辻井正らが翻訳紹介を行っている³。ピラミッド・カリキュラムは、今回取り上げる乳幼児カリキュラムのなかで、最も構造化されたカリキュラムのひとつである。その理論には、ヴィゴツキーだけではなく、様々な心理学の理論を組み入れながら柔軟に活動が展開されるように一定の配慮がなされている。ただし、保育形態はプロジェクト型といいつながらも、教師の指導や内容も含め規定されている。また、CITOの主導の下されているため、学力テストなどの標準テストでの評価が導入されており、この点もこのカリキュラムの特徴といえるだろう。

2) ゴールデン・キー・プログラム (The Golden Key Program)

ヴィゴツキーの孫娘でもあるロシアのクラフツォワ (Kravtsova E.) らが開発した乳幼児カリキュラムである。ヴィゴツキーの文化歴史的理論をベースに構想されている。その特徴は以下の6点に整理される (Kravtsov & Kravtsova, 2018)。

第一に、異年齢集団のグループで形成されている。3歳から6歳の子どもたちの異年齢クラスを構成している。ただし、同年齢のグループでの活動も数時間取り入れている。

第二に、カリキュラムのなかでは「家族的な要素」で構成されている (異年齢など)。この点については、家庭との連携を重視している。家庭での生活と就学前施設の連続性を重視し、家庭的な雰囲気の中子どもが生活できるように心がけている。同時に、保護者の参加も要請している。また、幼稚園の多様な職員 (教育者、医師、警備員、調理師など) は幼稚園というコミュニティにおいて、生活者であり、教師であるという立場がある。生活や労働を通じて学ぶことを教育のあり方だと考えている。

第三に、子どもと大人における生活場面での行事を重視している。ロシア語のС о в е тは他の言語に翻訳できない意味が含まれている。すなわち、労働と同時に、「共存 (co-existence)」を意味している。このことから、その個人にとって意味深い出来事を作り出すことがポイントとして挙げられる。この行事には、情動的な体験であること、さらに意味ある知識を獲得するメカニズムと子どもの発達をうながす環境を作り出すことが重視されている。

第四に、教育と発達の相互作用および相互依存性がある。これはヴィゴツキーの教育と発達の相互依存的な捉え方によっている。就学前には授業は行わない。生活のなかで、日々学んでいると捉えている。そのため、教授と学習をバラバラにとらえるのではなく、同時に、相互に依存し

ながら成立するという原理の上にある。そのため、異年齢集団の作業が可能になるのである。

第五に、ペアの教師らによる。ここではヴィゴツキーの最近接発達領域の概念が重要視される。子どもが1人で課題を解決している場合、一人目の教師は見守り、2人目の教師/助手は状況に関して積極的な関係で働く。このようにして、子どもは今、活動の対象となっており、発達可能性の領域の中で、子どもは大人の教師が何を話しているかを理解しようとしている。例えば子どもが一人でプロジェクト型の実践をしている。

第六に、レッスン・プロットである。端的に言えば一つのテーマから、複数の学習内容を探求していくシステムである。かつて、ソビエト教授学におけるコンプレックス・システム（総合科学）を現代的にアレンジしている。コンプレックスシステムを「スポット」として切り分けているのである。言い換えるならば、ひとつのプロジェクトを通して、複数のねらいや系統の学びへとつなげていくという考えである。ひとつの例として挙げられているのは、年長の子どものための「サントペテルブルクから海を渡ってオーストラリアに行こう」とするといったプロジェクトを組む。このプロジェクトには船の速度や航海図面や食料、天候などを自分たちで調べながら遊びを展開していく。ただし、初等教育における教科に分断された知識の先取りではないよう配慮されている。

これらのカリキュラムは、具体的には、遊びを中心としたプロジェクト活動であり、保育者は子どもの遊びの理解者として、そして、家族（親）として、親しい大人としての役割を果たすことが求められている。

そして、遊びを中心とした活動を通して、自己形成（Self-regulation）の能力と他者とのコミュニケーションの能力を育てることを主眼としており、文化的発達により、自由を獲得し自立した人間形成をねらいとしている。

以上のようなゴールデン・キー・カリキュラムの特徴は、集団を家庭としてみなし、保育者および親の役割を明示している点である。また、自己の感情をコントロールし、自分自身で制御することを自己形成としてとらえており、他者とのコミュニケーションなど言語活動を重視している点も特徴といえるだろう。

3) ナラティブ・プレイ・ペダゴジー (Narrative Play Pedagogy)

ナラティブ（・プレイ）・ペダゴジーは、フィンランドおよびリトアニアで開発された、物語を中心とした乳幼児カリキュラムである。ハッカライネン（Hakkarainen, P）らが開発した。4歳から8歳までの子どもを対象とした、自由遊びをベースにして、大人と子どもが協同で物語遊びを構築し、劇遊びを展開していくというカリキュラムである。

保育施設内での保育活動とともに、プレイワールドと呼ばれる、教員養成の学生たちがファシリテーターとなり、子どもと劇遊びを発展させていくプロジェクトを組み入れている。これらの活動では、小グループに分かれ、異年齢で活動する。また、ファシリテーターの介入の重要なポイントとして、ナラティブ・ペダゴジーでは、遊びを通して発達を促すために、保育者や学生たちが、より深い葛藤を与え、さらなる「学びのレディネス（learning readiness）」を発達させていくことを目指している。この「学びのレディネス」とは、「学校のレディネス（school readiness）」とは異なるものとして、実質的な学びへの意欲の発達を指している（Hakkarainen & Bredikyte, 2018）。

例として物語遊びとしては共同で劇（ドラマ）を制作していく活動がある。子どもたちの集団のなかに学生が数人入り、部屋のなかでごっこ遊びを展開する。その遊びのなかに登場する例えば、「お城」「森」「ロバーの隠れた場所」「宝」などのキーワードをプロットとして書き留める。その後、学生たちが子どもたちと一緒に対話をしながら、地図を作ったり城の構造や宝のありか

などを詳細にプロットとして発展させていく。その後、再度劇遊びのセッションを繰り返す。その際、新しい社会的状況に置き換え、登場人物の心情を理解しながら表現する物語遊びへと発展させていくのである。

ナラティブ・ペダゴジーの評価は大きく二つの観点から行われる。一つ目は、ナラティブロールプレイの形態が発展したか否か、二つ目は、物語遊びを通して、子どもの「学びのレディネス」が発達したか否かである。言い換えるならば、充実した遊びが協同で構築されたか否かという遊びの質が問われている。充実した遊びとは、「キャラクターの社会的集団性」「想像的であること」「創造的であること」「持続して発展していること」「挑戦的であること」「ナラティブの構造を有していること」などの条件がある (Hakkarainen & Bredikyte, 2018)。基本的にこれらの観点をもとに教師らが評価するが、7・8歳の子どものアセスメントでは主要なテーマに対する自己評価と観察などで補われる。

このカリキュラムの特徴として、教師は特別な役割と姿勢が求められる。子ども自身が目標に向かって発達しているかをモニタリングする力と同時に、教師自身自身も特別な目標に子どもの遊びに参画できているかを客観的にモニタリングする力が求められる。具体的には、子どもの最近接発達領域を踏まえ、発達を押し上げるような働きを遊びのなかで行えたか否かを検討される。

このようにナラティブ・ペダゴジーでは、遊びに参画する教師の役割を明確化している。その意味では、教師自身も主体として遊びに参画するし遊びの発展に寄与する主体とみなされる。他方で、このナラティブ・ペダゴジーは大人や学生の積極的な介入が適切に行われることによって遊びが発展するという前提がある。その意味での子どもの遊びを「見守る」という視点は弱い。この点に、遊び観が反映されていると考えられる。

4) 学びへの鍵カリキュラム (The Key to Learning Curriculum)

イギリスとロシアの研究者らにより共同開発された乳幼児教育カリキュラムである。その基礎には、ヴィゴツキーの他に、レオンチェフ、ザポロージェッツ、そしてベンガーの理論がある。このカリキュラムは、ヴィゴツキーの発想をもとにした以下の3つのテーマで構成されている (Veraksa & Dolya, 2018)。(1) 子どもの文化的発達をうながす上で、大人の存在 (より有能な仲間) は必要不可欠である。(2) 文化的道具のシステムの習得 (appropriation) は重要である。(3) 就学前の子どもの心の構造は感性によって支配されている。

学びへの鍵カリキュラムは、特に自己調整能力の育成を柱とした、問題解決型のプロジェクト活動になる。12のカリキュラムユニットと60のセッションに区分けされている (Table1 参照)。そしてそれぞれに難易度の異なる2つのレベルの活動を用意している。

Table.1 学びへの鍵の学びの目標とカリキュラムの構成要素 (Veraksa & Dolya, 2018, p.1069)

乳幼児期の学びの目標	発達の認知的カリキュラム				
人格的, 社会的, 情動的発達	発展的ゲーム	あなた-私世界	創造的モデリング	表現運動	ストーリー文法
コミュニケーション, 言語, リテラシー	ストーリー文法	アートグラフィックス	発展的ゲーム	あなた-私世界	創造的モデリング
問題解決, 論理性, 数理	数感覚	算数と論理	構成	創造的モデリング	視覚空間
知識と世界の理解	説明	あなた-私世界	視覚空間	構成	創造的モデリング
身体的発達	表現運動	アートグラフィックス	発展的ゲーム	創造的モデリング	構成
創造性の発達	発展的ゲーム	創造的モデリング	アートグラフィックス	表現運動	構成

学びへの鍵カリキュラムは、教授学習プロセスを3つの段階に分けている。第一段階は、教師主導で教授モデル、次に教師と子どもと一緒に活動を行う共同モデル、第三に子どもたちが考え活動する自発的モデルである。

このカリキュラムの特徴は以下の3点である。第一に、子どもだけでは直接解決することができない課題状況がある。第二に、プロジェクト活動は、子どもたち自身が問題解決のために多様な可能性の探究をすることが推奨されている。第三に、プロジェクト活動は、子どもたち自身の関心に応じて選択され、構成されている。

以上のような学びへの鍵カリキュラムは、今回のカリキュラムのなかでは、最も言語リテラシーや数的理解などを認知的な資質能力の育成を重視している。また、保育内容も子どもの自発的な遊びというよりも、構造化された問題解決型の遊びが中心となっていた。その意味では、より学校での学習活動の基盤を養うことを目指したカリキュラムといえる。

5) 心の道具 (Tools of the Mind) カリキュラム

アメリカのポロドヴァとレオンが開発した乳幼児教育カリキュラムである⁴。今回検討する6つのカリキュラムの中で最も広く知られているカリキュラムであり、ユネスコのデータベースINODATAとThe Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning (CASEL)に選出されている (Bodrova & Leong, 2018)。

このカリキュラムは、ヴィゴツキーの文化歴史的理論をベースに、ザポロージェッツの子どもの発達の増幅 (amplification) 概念を鍵として掲げている。心の道具カリキュラムは、特に2歳から6歳の子どものごっこ遊びの充実を主な保育内容として、社会情動的スキルと認知スキルの発達を促すカリキュラムを柱としている。なおこのカリキュラムにおける「道具」とは、ヴィゴツキーが述べている心理的道具を想定しつつ、話し言葉 (speech) や書き言葉 (writing) だけではなく、描画 (drawing) や物理的な玩具など多様な道具が想定されている。ただし、精神外カテゴリーでの道具使用から、精神の道具として自己統制としての機能を果たすことが重視されている (Bodrova & Leong, 2018)。

ポロドヴァらが挙げている充実しているごっこ遊びとは以下の3つの特徴がある。第一に、モノの見立てを含まれていることである。現実の物質 (玩具) を何か別ので代用することで、現実世界を超越することをごっこ遊びのなかでは起こりえる。この現実と想像の記号操作が充実した遊びには必要とされる。

第二に、特別な役割を演じることが求められる活動であることである。子どもが何か別の役割を演じることで、様々な役割上の制約に従う必要がでてくるこの点が自己統制の発達と同時に楽しさを醸成しているという。

第三に、異なる台本と役割に関係した道具を統合するより複雑な遊びのシナリオがあることが特徴として挙げられる。ごっこ遊びの筋書きが発展していくことを意味している。お店屋さんで売り買いするだけではなく、様々な事件や出来事により遊びのメンバーや役割が変化していく。

また、これらの遊びに対して教師の教育的なかかわり (scaffolding) は不可欠であるというスタンスをとる。保育者には、遊びが充実するように環境への配慮を含め、様々な教育的なかかわりをすることを求めている。

以上のような心と道具カリキュラムは、ヴィゴツキーの心理的道具 (言語) の発達を重視しながらも、認知的発達ではなく、遊びを通した自己統制や社会情動的な能力について強調されている。また、大規模調査やランダム比較化実験によるエビデンスも提示されている研究として注目されている。

6) 発達的教育カリキュラム (Developmental Education)

オランダの発達的教育カリキュラムは、2歳から8歳までの子どもたちを対象とした乳幼児カリキュラムである。異年齢クラスで構成されており、「遊びの機会」を損なわないように、「教育の機会」を埋め込むことに配慮している。発達的教育カリキュラムは、遊びを文化的活動の特定の形式とみなし、文化的共同体が子どもに許容する活動、高い没頭度、自由度を構成する内容を構想している (Pompert & Dobber, 2018)。

発達的教育カリキュラムは、自己統制や対話、シンボル表現、計画などといった一般的能力と、読み書き算数といった文化的内容の知識や技能の習得の両者を含んでいる。

このカリキュラムでは、実生活における文化的実践への参加を通じた言語やシンボル表現（描画や写真など）を用いた伝達能力 (communicative ability) の育成が核となる課題となる。このようなカリキュラムには、異年齢の遊びや活動が適宜組み込まれることになる。基本的には子どもの自発的な自由な遊びが尊重されている。教師の役割としては、「方向付け」「活動の調整と深める」「活動を広げる」「新しい行為の付加」「省察」の5つの役割が求められている。

これらの活動の評価については、HOREB (Handelingsgericht Observeren, Registreren en Evalueren van Basisontwikkeling) という、構造化された行動観察ツールを用いて評価する。デジタル化されており、子どもたちの遊びのなかにみられた言語リテラシーや数的、構成的活動について記録する欄、子どもたちの日々の学びの物語を記録する欄、そして子どもの発達について記録する欄などに分かれている (van Oers, 2012) ⁵。

以上のような発達的教育カリキュラムは、保育内容として「遊びの機会」を損なわないように「教育の機会」を埋め込む、というバランスを重視していた。さらに、遊びの通しての自己統制だけではなく、文化的内容としての知識や技能を重視していたことも特徴のひとつであった。

4. おわりに～各カリキュラムの特徴と遊び観の違い～

本研究で検討してきた6つのカリキュラムに共通する特徴を整理すると、以下の3点に整理できるだろう。第一に、いずれも遊びを中心とした保育内容が構想されていた。これはヴィゴツキーの、主導的活動として遊びを重要視していたことから理解できる⁶。第二に、教師・保育者の教育的なかわりが前提となっているという点にある。カリキュラムによっては、発達の最近接領域の概念を参考にしており、また多くの場合が異年齢グループであるという点も関連している。第三に、自己抑制の能力および社会情動的能力の発達を目的としているという点にある。

Table2. ヴィゴツキーに基づく乳幼児カリキュラムの比較表（筆者作成）

	ピラミッドプログラム	ゴールデンキープログラム	ナラティブ・プレイ・ペダゴジー	学びへの鍵プログラム	心の道具プログラム	発達の教育プログラム
育てたい資質能力	認知的知能、情動知能、身体知能	自己統制、コミュニケーション	「学びのレディネス」	社会情動的発達、言語リテラシー、数的理解	自己抑制、言語発達（話言葉、書き言葉）	言語リテラシー、数的理解と文化的内容的知識技能
遊びへのスタンス	枠のなかでの自由遊び	ねらいが明確なプロジェクト活動	大人が関わる物語遊び	構造化された遊び	ごっこ遊び	自由遊びを崩さないような介入
保育者の役割	支援者	遊びの理解者、家族、親しい大人	遊びを深め、広げる保育者	共同支援者	教師の「足場かけ」	5つの役割
評価	観察、ポートフォリオ、標準テストなど	—	保育者の評価と子どもの自己評価	発達評価、テスト等	RCTでのエビデンスあり	HOREBIによる行動観察ツール

その一方で、同じ遊びを中心としたカリキュラムといってもそのスタンスは大きく違っていた。ピラミッド・カリキュラムの遊びは、カリキュラムに位置づけられた枠のなかでの自由遊びである。また、学びへの鍵や心の道具カリキュラムは、まず先に発達課題や構造化されたねらいがあり、そこから出発した遊びを充実させていくスタンスである。そして、ナラティブ・プレイ・ペダゴジーとゴールデンキー、発達の教育カリキュラムは、子どもの文脈のなかから出発した自発的な遊びであり、その文脈のなかに文化的な内容の習得が含まれている。このように同じ遊びをベースにしているといっても、そのスタンスは異なっている点が重要であろう。この遊びへのスタンスの違いは、保育者の役割にも反映されており、発達課題やねらいといった大人をはじめとする社会が設定している場合は、比較的指導的なかわりを重視する傾向にある。

Van Oers (2018) は、すべてのカリキュラムに共通して言えることとして、文化的価値 (meaning) と、子ども／教師の個人的価値 (sense) のより良いバランスを模索しようとした意欲的で野心的な試みであるとしている。この議論をふまえるならば、読み書きや知識技能といった文化的価値と、子どもの価値である遊び、教師の価値である指導といった概念は一概に対立するものでなく、ある程度バランスよく融合させていくことが求められているといえる。

これまでの日本の議論では、子どもの自主性や主体性といった子どもの個人的価値を重視するのか、教師の個人的価値を重視するのかといった議論が多かった。さらに、遊びといった活動のなかの、文化的価値である知識や技能という側面は、捨象しようとする傾向にあったように思われる。しかし、今回のヴィゴツキーの理論をもとにした乳幼児カリキュラムでは遊びを通して文化的価値をすることを積極的に位置づけていた。このことは、冒頭の OECD の分類、および、遊びか学びかといった二元論的な捉え方を相対化する視点を与えてくれると考えられる。

引用参考文献

対象となる文献

- Bodrova E., Leong D.J. (2018) Tools of the Mind: A Vygotskian Early Childhood Curriculum. In: Fleer M., van Oers B. (Eds) International Handbook of Early Childhood Education. Springer International Handbooks of Education. Springer, pp 1095-1111
- Hakkarainen P., Bredikyte M. (2018) The Program of Developmental (Narrative) Play Pedagogy. In: Fleer M., van Oers B. (Eds) International Handbook of Early Childhood Education. Springer International Handbooks of Education. Springer, pp 1041-1058
- Koerhuis (red) I.G.M., Boontje M., van Boxtel H., Breebaart D., op den Kamp M. (2018) Piramide. In: Fleer M., van Oers B. (Eds) International Handbook of Early Childhood Education. Springer International Handbooks of Education. Springer, pp 995-1022
- Kravtsov G., Kravtsova E. (2018) The 'Golden Key' Program and Its Cultural-Historical Basis. In: Fleer M., van Oers B. (Eds) International Handbook of Early Childhood Education. Springer International Handbooks of Education. Springer, pp 1023-1039
- Pompert B., Dobber M. (2018) Developmental Education for Young Children in the Netherlands: Basic Development. In: Fleer M., van Oers B. (Eds) International Handbook of Early Childhood Education. Springer International Handbooks of Education. Springer, pp 1113-1137
- van Oers B. (2018) Long-Standing and Innovative Programs in Early Childhood Education: An Introduction. In: Fleer M., van Oers B. (Eds) International Handbook of Early Childhood Education. Springer International Handbooks of Education. Springer, pp 969-993
- Veraksa N., Dolya G. (2018) The Key to Learning Curriculum. In: Fleer M., van Oers B. (Eds) International Handbook of Early Childhood Education. Springer International Handbooks of Education. Springer, pp 1059-1073

¹ ヴィゴツキー (1989) 神谷栄司 (訳) 「子どもの心理発達における遊びとその役割」 神谷栄司 (編) 『ごっこ遊びの世界』 (pp.2-34) 法政出版.

² NAEYC article 2013 Article in NAEYC magazine Young Children about Piramide in the USA.

³ 例えば辻井正 (2007) 未来保育園・幼稚園—ピラミッド教育法, ブラザー・ジョルダン社. 辻井正 (2013) 小学校との連携 プロジェクト幼児教育法—Cito 旧オランダ王立教育評価機構ライセンスカリキュラム Piramide Method, オクターブ社を参照.

⁴ Bodrova, E., & Leong, D. J. (2007). Tools of the Mind: The Vygotskian approach to early childhood education (2nd Ed.). Columbus, OH; Merrill/Prentice Hall.

⁵ van Oers, E. (2012). Evaluation of learning and development. In B. van Oers (Ed.), Developmental education for young children. Concept, practice and implementation (pp. 223-238). Dordrecht: Springer.

⁶ ヴィゴツキー (1989) 同上.

付記

本論の一部は、日本保育学会第 72 回大会 (2019) で発表した。